岡豐風土

〈高知県立歴史民俗資料館〉　第7号　1993年4月1日

物理学者・地理学者と地図

高知大学教授　大脇保彦

堀淳一さんの『地図のたのしみ』(河出書房新社)という本がある。初版は一九七二年であるが、今、手許にあるのは一九七四年刊で、一六版とあるので、いわゆるベストセラー的に読まれたことが分る。

そういえば、この前後は、珍らしく地図書のブーム期で、織田武雄先生の『地図の歴史』(講談社　一九七二年。要約されたものは「講談社新書」にも入っている)、矢守一彦氏の『都市図の歴史　日本編、世界編』(講談社　一九七四年、一九七五年)と啓蒙的地図書の出版があいつぐ状況だった。それ以前にも、藤田元春『日本地理学史』(一九四二年)、鮎沢信太郎『鎖国時代の日本人の海外知識』(一九五三年)、秋岡武次郎『日本地図史』(一九五五年)などの有名な専門書はあったが、一九七〇年代になって、わが国では漸く、研究も幅広く、奥行きもあるものが蓄積されるとともに、社会一般でも地図や地図史への関心も高まり始めたといえる。

しかし、堀淳一氏は物理学者で、地図学や地理学の専門家ではない。いわば、趣味の立場から『地図のたのしみ』を書いておられる。それだけに、一般読者層のみならず、専門を自負する人達も引き込まれ、地図の本質の一面を新鮮に示唆される。日本エッセイスト・クラブ賞受賞されたのも当然であろう。

ところで、『地図のたのしみ』は叔父にあたる朝永陽二郎氏(兄上はノーベル物理学賞受賞者振一郎博士)に献呈の形で書かれている。朝永氏は京大文学部出身の地理学者である。因みに同大学地理学教授室は、東大出の地生学者でもあった小川琢治博士により文学部に創設された。小川先生は、わが国で最初にノーベル賞を受けた湯川秀樹博士の父君でもある。また、小川先生が中心に蒐集された古地図類は、京大文学部博物館の古地図コレクションの主要部をなすと聞いている。

そういえば、戦前における地図をみるたのしみを啓蒙した人は、いうまでもなく、寺田寅彦である。随筆の『地図を眺めて』はあまりにも有名であり、堀淳一さんの書名にも恐らく影響を及ぼしていると思われる。明治・大正期をかけて、わが国の近代五万分の一地形図は完成するが、その地形図の重要性、たのしみ方を述べられたもので、地形図はコーヒー一杯分より安い、地下街が出来た際の地形図の表現の問題指摘などを含めて、何度読み返しても常に新鮮な示唆に驚かされる。寅彦は、地理学専門誌にも地形図の計測に関する論文を寄稿し、未だに、傾斜度測定法に「寺田法」という一手法が定着している。この場合も、地形図でたのしんでいるうちに、これを思いついたという意味のことが確か書かれていたが、小生のような研究者の端くれには耳が痛い半面、大きな示唆を与えてくれる。

寅彦と地形図の出会いについては未聞だが、ベルリン大学留学中、物理学研究室以外に地理学研究室にも足繁く通ったことが随筆からも知られる。とくに週末に恒例の地理学巡検(フィールドワーク)には積極的に参加し、解散後のビール会も含めて、大いに楽しまれたようである。地図片手に歩く地理学巡検の体験が、あるいは、寅彦と地図を強く結びつける契機になったのかも知れない。

ところで、堀淳一さんは、叔父陽二郎氏からもらった地図帖や買ってもらった地形図が地図への関心をひく動機になったという。同じ様な体験は小生にもある。とくに、旧制中学時代、

確か三省堂の地図帖であったと思うが、美しいカラー、地形の鳥かん図、都市図などに胸がわくわくしたことを想い出す。暇があれば、そこから湧くイメージを楽しんで過ごしたことであった。

確かに、絵図から記号的な実測図へが地図の近代化の過程ではある。だが、地図のもつ情報やたのしみの一部を失った面もある。欧米地図の中には、とくに都市図のように、いまだに絵図的手法を取り入れているものが多くあり、わが国でも大都市部で一部試みられているのは、当然のことでもあろう。教育面でも、もっと絵地図の活用が望まれよう。

古地図は、文化財、研究資料、芸術として存在するのみならず、絵図的側面に限っても、現在地図にもその復権が求められている。地図はたのしむものである点を、物理学者からいつも教えられて来たのは、不思議な縁である。学問も、独立したものでなく、人の関係、縁の中でいつも命を新しくするといえば、陳腐かこじ付けのそしりを受けるだろうか。

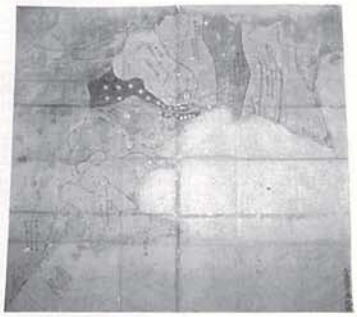
江戸時代の土佐と古地図

企画展「土佐　古絵図展—描かれた土地の歴史—」より

梶原　瑞司

平成五年度の第一回企画展は「土佐古絵図展—描かれた土地の歴史—」と題し、江戸時代の土佐を描いた各種の絵図を県下各地より集め、四月二十九日（木・祝）より五月三十日（日）まで開催する。

古来、班田図や荘園図など土地を描いた様々な絵図が作成されているが、やはり本格的に絵図や地図の作られ始めるのは幕府を中心とした強力な封建体制の確立した江戸時代からである。以下主な見どころを紹介しよう。



土佐国石高地図　高知県立図書館蔵
各郡を色分けして石高と路程を示している。

国絵図

幕府は、日本の全貌を掌握するため、古代からの「国」ごとの絵図および石高（米の収穫高）を記した郷帳の提出を全国の藩に命じている。そして史上初めて一定の基準を用いた日本地図が作られることになった。慶長、正保、元禄、天保の四度にわたるこの国絵図作成事業により、大名たちもまた自らの領地の確認をすることができたのである。現代と違って測量技術も未発達で交通も不便な時代において強大な権力がそれを可能にした。

これらの絵図は天保期のものが国立公文書館に残る以外多くは失われているが、土佐については幸い元禄期の控え図とみられるものが現存する。約三万七千分の一の縮尺で作られたこの図は、大きさが、たて五・六m、横七・六mにも及ぶ巨大なものである。今回はこのうちの主要部を展示する。

土居絵図

関ヶ原の戦の後、長宗我部氏に替わり新領主として入国した山内氏は、在地武士達の動きに備え、また東西に長く交通の極めて不便な土佐の支配を行うため、藩内の要所要所に家臣を配置する分割統治を行った。これらの地には「土居」と呼ばれる家老の居館を中心とした小城下町が形成された。

江戸時代初期の五枚の土居絵図は安芸の土居付家老・五藤家に伝わったもので、全国的にも貴重なものである。絵図からは屋敷割や防御の工夫などが知られると共に、現代と比較して町の姿の変遷もわかり、時代の一断面を語る豊富な情報が盛りこまれている。

なかでも注目されるのは「宿茂土居絵図」において、寛文改替により失脚した野中兼山の遺子たちの幽閉場所が描かれていることである。家地を囲む柵列や番所も見え、厳重な監視下におかれていたことが知られる。そこには文献資料のみでは知り得ない、生々しい歴史の事実がある。まるでその時代にタイムスリップしたかのような臨場感を我々に提供してくれている。

航路図、沿岸図

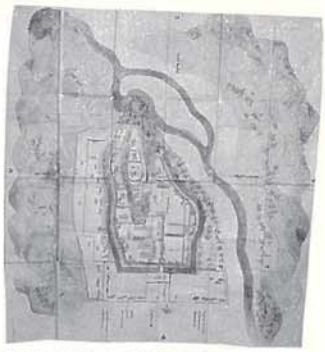
土佐は三方を海に面し、北を峻険な山地にさえぎられる地勢にあり、舟運は重要な交通、運搬手段であった。

土佐の船舶は、大坂、瀬戸内そして

江戸や長崎にまでも交易に出ている。この船頭たちの航海知識は海路図のかたちで記録されている。これらは実際の地形を正確な縮尺で表わすものではないが、岬や湾、出入りする湊など航海のポイントとなる場所を押さえたものである。また、陸地の風景などが美しく描かれ、見て楽しめる絵画的な要素も感じられる。

坂本龍馬と地図

土佐に生まれた龍馬は脱藩後、近代国家・日本の成立を目指し東奔西走する。彼のこの活発な行動力の源泉は何にあったのだろうか。ここに彼の世界感を育んだ一助となったかもしれない地図資料がある。

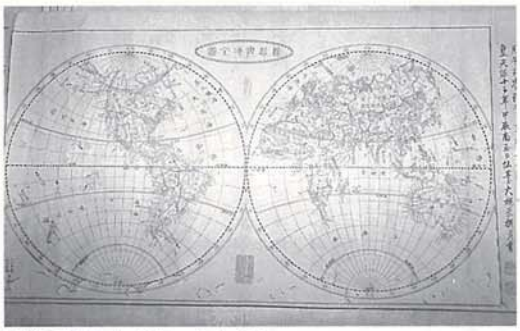


安喜土居構之図　安芸市蔵
堀割や土塀に囲まれた中に種々の建物が見える。

坂本家の本家・才谷家は豪商として知られており、酒造原料の米を買求めに海路、備前、備中との間を往来するなど盛んに航海を行っている。才谷屋に伝来したとされるこの「日本海路記」は四国から大坂、江戸、陸奥にまで至る航路を記している。後に海援隊を率い海を通じて異郷の地へと広がる彼の発想の源は、こうした彼の生家の環境に求められるかもしれない。

土佐国海道図　高知県立図書館山内文庫蔵
甲浦から宿毛にいたる陸路が風景画のように描かれている。

また、龍馬の継母の里である仁井田、川島家は藩の出入り商人で、その頃の当主猪三郎は「ヨーロッパ」の呼称でよばれたほど西洋の事情にも通じていたといわれている。龍馬も度々当家を訪れていたとされるが、ここには「新製輿地全図」という刷本の世界地図が遺っている。この地図は比較的正確な世界の様子を伝える弘化年間のもので、当家へ遊びに来た龍馬がこの地図を目にした可能性は充分にある。まだ見ぬ世界に向けて少年・龍馬が希望に胸をふくらませたことは大いに想像されるところである。



新製輿地全図　川島　文夫氏蔵
坂本龍馬の継母の里・川島家に伝わった世界図。少年・龍馬が希望を胸に見ていたかもしれない。

河田小龍と鳥瞰図

小龍は江戸後期から明治中期に生きた画家であるが、アメリカより帰国したジョン万次郎の取調べを行い『漂巽紀略』を著し、この知識を坂本龍馬に伝えたという開明的な人物でもあった。

彼が描いた絵図に「土佐絵図」がある。この図は土佐湾の安芸沖上空から高知県全体を絵画化した図で、向って右に室戸岬、左に足摺岬が描かれている。

これは「鳥瞰図」とよばれるものである。おそらく当時の地図をもとに山上や海上より眺めた風景を参考にしたものであろうが、それにしても見事な地形の捉え方であり、単なる風景画にとどまらない近代的な空間を観察する目が感じられる。

現代の我々が使用する地図といえば航空測量やコンピューターを駆使した高精度のもので、多くの情報が盛りこまれ規格性の高いものである。江戸時代の絵図は、正確さにおいてはこれに比べるべくもない。

しかし、手描きで丁寧に彩られた絵図は素朴ながら、現代図にはない絵画的な美しさやアイデアが施されており、実に味わい深く見ていて飽きさせない魅力がある。

ぜひともこれら古絵図の良さを味わって頂きたい。

＝企画展「土佐の戦国時代を掘る」講演会から＝

土佐の中世山城

〈高知県埋蔵文化財センター調査員　松田直則〉

土佐に築かれた中世の山城は、現在六〇〇～七〇〇城跡が確認されているようです。県内の分布調査が終了すればさらに増えてくると考えられます。お城というと高知城を思い浮かべますが、高知城のような天守閣を持った城が近世に突如出現したのではなく、城はそれぞれの地域で歴史的に発展を遂げ近世の城郭が造られているのです。中世の城が構築されるのは、南北朝の頃と考えられていますが、土佐では中世でも後半期の一五世紀頃にその多くが造られています。この城は、山城・平山城・平城に大きく分類できますが、土佐に築かれる多くの城は山城と平山城です。中世山城の研究は、中世史を語るうえで重要な研究テーマと言えるでしょう。

城郭も含め中世という時代を研究して行くには、文献史学・考古学・歴史地理学・城郭研究・民俗学等の方法論の異なる研究が強力しあい学際的研究を行うことが必要です。中世城郭は、文献史学を中心に研究されていましたが、昭和五十年前半頃から発掘調査が始まりその後頻繁に調査が行われています。さらに長宗我部元親の居城岡豊城周辺や、一条氏の館周辺では歴史地理的研究により市町（いちまち）の復元もされています。

最近では、城郭の考古学研究が進み、中世山城の姿が少しずつ解明され始めてきました。出土遺物により機能した時期が明確になり城の構造もわかり始めました。岡豊城・中村城などは、礎石を利用した瓦葺きの建物跡や石垣を利用した城の構築をしていることがわかり、芳原城や栗本城・扇城などは、掘立柱建物で土塁や棚、竪堀や堀切で防御する城の造り方をしています。前者は鉄砲などを意識した石造りの城、後者は土造りの城と言う分け方ができます。土造りの城が古く、石造りの城が新しい時期に位置付けられます。

城郭研究（縄張り研究）も調査が進み、堀切や竪堀の構築方法などで城の変遷もわかり始めてきました。今後の課題は、中世山城を地域史の中に位置付けて行くことが重要なことと考えます。

発掘された長宗我部氏の城―岡豊城跡―

〈高知県埋蔵文化財センター調査第二係長　森田尚宏〉

岡豊城跡は長宗我部氏の居城として著名な、土佐を代表する中世の城跡です。現在では発掘調査の成果を基に、歴史民俗資料館と一体となった史跡公園として多くの人々に親しまれています。

城跡は岡豊山（標高九七メートル）の山頂部に詰を中心とする主郭部が位置し、西の尾根上には伝厩跡曲輪、南斜面には伝家老屋敷曲輪の二ヶ所の副郭をもつ連郭式の山城です。また、南の山裾には国分川が自然の要害として流れ、北と西へ延びる尾根上には二重の堀切が掘られています。さらに、南から西斜面にかけては連続する竪堀群が、西北斜面に横堀もみられ、防御を固めていたことが分かります。

発掘調査は昭和六十年から六ヶ年にわたり行われており、詰とこれを取り囲む二ノ段、三ノ段、四ノ段からは、注目される遺構、遺物が発見されています。詰からは建物の基礎と考えられる石敷遺構と礎石、さらには「天正三年」の年号をもつ瓦も発見されており、位置や基礎構造からみれば天守の前進である重層、瓦葺きの望楼的な建物であったと考えられます。三ノ段にも九×五間と規模の大きい礎石建物跡と、詰への階段と通路跡が検出され、各曲輪における建物の配置状態等も確認されたことにより、主郭部の構造も判明してきました。

出土遺物には、多量の土師質土器の他に輸入磁器として染付、白磁、青磁国産陶器では備前、瀬戸等がみられます。また、弾丸や鎧の破片、小柄、石臼、鍛冶の炉に使われる羽口や鉄滓も出土しており、城における生活や生産の跡をみることができます。

以上のように岡豊城跡は、発見された礎石建物や虎口部分の構造からみれば、近世城郭に近い要素を多くもっており、元親時代の後半、出土瓦の年代からは土佐統一の時期に中世山城からの大規模な改築がなされたものと考えられます。このことは、安土城にみられるような中世から近世への城の発展を知るうえで重要であり、岡豊城跡にその進化の跡を追うことができます。

＝史料紹介＝

城下町家扣(三)

吉村　淑甫

〃	七間	弐拾間	福留倉丞
〃	拾間	弐拾間	村田弥六
〃	四間	弐拾間	高松茂左ヱ門
〃	三間半	弐拾間	徳弘光平
〃	三間半	弐拾間	村野氏太郎

（表口）　（裏行）

西表	壱間七寸	七間	廿枝屋	鋏蔵	北表角	三間半	拾壱間弐尺三寸五歩
右同	四間	七間	田村屋	常次	北表	七間	拾壱間弐尺二寸五歩
〃	弐間半	七間	魚売	専右ヱ門	右同	三間半	弐拾間
北表角	七間	拾弐間弐尺五寸五歩		志和武平太	〃	七間半	弐拾間
北表	七間	弐拾間	川田儀右ヱ門		〃	八間	弐拾間
右同	七間	弐拾間		横山　次平	〃	半間	弐拾間
〃	三間	弐拾間		小松　竹助		右裏続ニ有	
〃	四間	弐拾間		小松　竹助	東西五間		南西拾間
〃	三間	弐拾間		岡　佑次郎	西表	五間	拾間
〃	四間	弐拾間		岡　佑次郎	右同	七間	弐拾間
〃	三間半	弐拾間		坂本　清丞	〃	三間半	弐拾間
〃	弐間	弐拾間		坂本　清丞	〃	三間半	弐拾間
〃	壱間半	弐拾間	下代類	楠左衛門	東表角	五間	拾間
〃	三間半	弐拾間	下代類	楠左衛門	東表	弐間半	三間半
〃	六間半	弐拾間		萩野　恒丞	右同	弐間半	三間半
右同角	四間	拾七間半		志和武平太	〃	拾間	七間
東表	弐間半	四間	酒井屋	与ヱ門	西表	拾三間	九間半
西表	弐間半	拾間半	久万屋	銀助	北表角	六間半	七間
右同	三間五寸	拾間半	高岡屋	利右ヱ門	右同	三間	七間
〃	三間五寸	拾間半	福井屋	七之丞	〃	四間半	弐拾間
					山本屋	傳助	
					真證寺	右同寺	
					大野利右ヱ門		
					加藤　庄蔵		
					片岡宗五郎		
						右同人	
					石鍋屋	貞平	
					小松翠太郎		
					柑屋	喜久治	
					下横目	愛丞	
					橋本屋	庄吾	
					大工	兼吉	
					富屋	助次郎	
					米屋	亀吾郎	
					橋本屋	庄吾	
					下代類	善丞	
					北村	段助	
					土方鎌五郎		
					下代類	半六	

（註記）

前号（二）の山田町筋（北新町）北側分に向かいあう南側分である。一丁目は酒井屋で了り、二丁目は橋本屋で了っている。なお四丁目に山隅神社が立っていたようだが、四丁目は出ていない。住居が無かった所為かもしれない。

此処南側分には志和武平太はじめ十九人の下級侍たちがいた。他に下代類四人、下横目一人の侍分が居る。北側の稲毛氏、池内氏、中山氏、吉村氏、楠瀬氏らほどに名を知られた人は見当らない。商家十軒程に交って魚売、紺屋、米屋などが居る。

二丁目に真證寺という寺があった。この寺は、「高知市街誌稿」（松野尾章行編）によれば、元々は京都、仏光寺末で、元禄十一年十月火災に遭い、旧記等を焼失、開基も分明でないという。曰く「古、高知新町ニ在り、火災後、塩田寺町ニ引遷」ったが「宝永四亥年、地震、大潮之時流没、其以後北新町ニ遷り、真光寺末」と成ったという。当時は「寺床拾弐代弐歩」だったそうだ。嘉永のこの記録に「表口七間、裏行拾壱間弐尺弐寸五歩」と出ているが、さらに隣地に「七間」の表口と「裏行弐拾間」が見られる。因みに同寺は明治維新後に退転したそうだ。

本棚

高知市の文化財

『高知市の文化財』編集委員会編

平成四年七月、高知市教育委員会より「高知市の文化財」編集委員会編の『高知市の文化財』（B5版　三〇八頁　内カラー図版一三九頁）が刊行された。高知市の文化財全般を紹介した書物には、昭和三四年（一九六四）に刊行された西村時衛氏編の『高知市の文化財』、昭和五四年（一九七九）に刊行された高知市教育委員会編の『高知市の文化財と旧跡』があり、本書が三冊目となる。

本書は、高知市に所在する国指定の重要文化財、県指定文化財、市指定文化財やそれに相当する文化財をカラー図版で収録している。また、「高知市の地質」「高知市の考古学」「高知市の歴史」「土佐の自由民権運動」「高知市の祭礼」「高知城の歴史と植物」の解説も掲載されている。執筆人は、各分野の第一戦で活躍されている研究者一五人である。収録された文化財は、高知市の東部から西部へ、北部から東部への順で配列され、冒頭に地図を掲載し、さらに拡大地図を配したものもあり、文化財散策をする人にとって細かい配慮がなされている。また、付録として「鑑賞の手引き」「文化財公開施設一覧」「参考文献」「年表」「索引」などがあり、より専門的な情報を知りたい読者に便宜をはかってくれている。

さて、文化財とは、本書にものべられているように「人間の諸活動を如実に語る資料として捉え」られている。そしてその保護に対しては、「保護の対象範囲も歴史的文化的社会的環境とさらに自然環境にまで及び物と一体化して保護する」ことが望まれている。それらを意図した本書は、編集委員の多大な協力と執筆人や各文化財所有者などの理解があってこそなしえたものである。また、本書の編集には並々ならぬ努力があったことを耳にしているが、それらの努力の成果のあとが本書の随所に見受けられる。そこに文化財に対する思いを汲みとることができたのは私だけではあるまい。

なお、本書は高知市教育委員会で三七〇〇円で一般に配布している。

（中村　淳子）

歴史散歩　第七回

永源寺と乾氏の墓所

国府小学校の南側の道を東進して伝紀貫之邸の北側を少し通り過ぎると、永源寺・卵塔の標識が見えてくる。

永源寺は「長宗我部地検帳」によると古くは真言宗の寺で観音寺と称していた。山内一豊の土佐入国後、曹洞宗に改め真如寺の末寺となり、山内氏家老の乾氏が国分、比江の地を知行するにあたり、乾氏の菩提寺となり、乾流寺と称した。その後宝永五（一七〇八）年の火災で焼失し、翌年再建後、永源寺と改称した。

寺の後方には、大墓十基を含む乾氏一門の墓が二列に並んでおり、当時の権勢の大きさを物語っている。

前列東から四基目が初代乾和三の墓である。和三は、美濃出身で山内一豊に仕え家老となった乾和信の弟で、養子となり家督を継いだ。和三は山内氏に従い土佐に入国した。山内姓を許されて山内備後和三ともいう。二代目は和成で、野中兼山追放に関り、寛文の改替を担った者の一人でもある。三代目の信勝の夫人は二代藩主山内忠義の三女である。

これらの人々の墓に続いて一門の墓がここにある。一列目には県下最大の卵塔（無縫塔）があり、二列目には笠を置く方柱状の墓が並んでいる。

〈土佐電鉄バス領石・植田行き国分小学校前下車、徒歩約十五分。〉

（曽我満子）

ニュース

～企画展示室から～

「土佐の戦国時代を掘る」

期間・・平成五年一月一五日～三月二一日

今回の企画展は、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターとの共催で開催した。土佐の戦国時代の遺跡といえばやはり山城跡を想像するが、集落や生活、信仰関係の遺跡や遺物についても取り上げてみた。山城跡では、近年注目を浴びた春野町芳原城跡や中村市の扇城跡、南国市の岡豊城跡から出土した土器や輸入陶磁器、青銅製品、鉄製品などをとりあげた。また、戦国時代に用いられた多くの木製品を絵とともに展示した。信仰関係のものでは、戦国時代の資料を所蔵している寺社の協力をえて、貴重な資料を展示することができ、戦国時代の人々の精神世界を垣間みることができた。

講演会は、二回開催し、第一回は一月二三日(土)午後二時～四時に埋蔵文化センターの松田直則氏が「土佐の中世山城」、森田尚宏氏が「発掘された長宗我部氏の城―岡豊城跡―」と題し講演し、土佐の戦国時代の山城の問題点ついて所見を披露してくれた。講演会は、満席状態で聴講者から多くの質問がでた。二月二七日には、当館の岡本桂典が「仏教考古学が語る戦国時代の土佐」と題し講演した。

企画展示室

講演会「土佐の中世山城」(平成5年1月23日)

〈歴民館日録〉

月日	出来事
平成四年 二月二八日～三〇日	収蔵庫燻蒸
平成五年 一月一五日	企画展「土佐の戦国時代を掘る」開幕
一月二三日	企画展講演会
二月一一日	第三回史跡巡り「高岡郡東部の史跡と文化財バスツアー」
二月二七日	企画展講演会
三月二一日	企画展閉幕

〈第三回　史跡巡り〉

二月一一日の祝日、「高岡郡東部の史跡と文化財」バスツアーが行われました。小村神社では国宝・環頭大刀、佐川町の不動ケ岩屋洞穴遺跡など八ヶ所の文化財や史跡を見学しました。

須崎の土佐藩砲台跡で香崎和平講師の話に熱心に耳を傾ける。

ユア・ボイス

「高知空港から案内標識を見ながら自動車で来ると、迷わず資料館に着きました。わかり易いですね。」と、県外のお客様からお誉めいただきました。従来のものに加え今年二月、東道路の二か所等に案内標識が設置され、東道路から国道三二号線への入り口がわかり易くなったのです。「山の上に見えるけど、さてどう行けばいいのだろう。」という声もあっただけに、案内標識の設置は喜ばしい限りです。ご協力いただいた関係各位に深謝いたします。なお交通につきましては、高知駅経由の「歴民館行」のバスも一日三往復運行していますのでご利用ください。

一方、「館内の順路がわかりにくい。」というご意見を頂戴しています。三階建で各階に展示室等が分散している建物の構造に拠るところが大きいのですが、各所に案内板を設置し、受付でもお客様に展示室の位置について簡単な解説を行うなど、その緩和をはかってきました。しかし、まだまだ改善の余地があるようです。

資料館の活動内容を充実させていくことは無論ですが、お客様に利用していただき易いように整備していかなければならないことが数々あります。

〔企画展の案内〕

土佐　古絵図展
―描かれた土地の歴史―

期間
平成五年四月二九日（木・祝）～五月三〇日（日）休館日五月六、一〇、一七、二四日

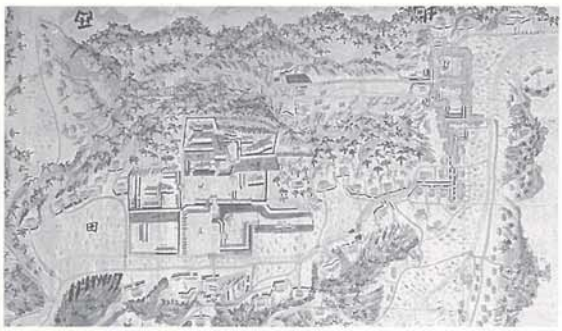
場所
一階企画展示室

江戸時代の土佐に関する絵図、地図を県内各地から集め開催します。現代、我々の使う精密な地図とは異なり、風景描写が取り入れられたり、ユニークな表現が用いられた古絵図には独特の味わいがあります。

また、歴史的な事件の隠れた事実が古絵図から発見されることもあります。

今回の展示では元禄時代の巨大な土佐国絵図のほか、旧家に秘蔵されていた土居絵図、坂本龍馬ゆかりの日本海路図や世界地図など日頃は見ることの難しい貴重な絵図類を展示いたします。

入館料は、大人四〇〇円、中高生一五〇円、小学生五〇円（常設展込み）



佐川土居図　安芸市蔵
中央に大きな土居の館、その周囲に家臣の屋敷、離れて町人町の家並みが描かれる。

〈講演会〉

日時　平成五年五月二二日（土）午後二時から四時まで

「古地図のたのしみ」
高知大学教授　大脇　保彦氏

講演会の入場は無料ですが、予約が必要です（定員八〇名）。入場を御希望の方は、一週間前迄に住所、氏名、電話番号を記入してハガキにてお申込み下さい。

〈利用案内〉

開館時間　午前9時～午後5時
（入館は、午後4時30分まで）

休館日　毎週月曜日（祝日及び振替休日にあたる場合は火曜日）12月28日～1月4日

入館料　一般・400円／中高校生・150円／小学

［常設展示］生・50円
団体（20人以上）割引きあり
（療育手帳・身体障害者1・2級、手帳所持者とその介護者高知県長寿手帳所持者は無料。毎月第2土曜日は小中高生は無料）

交通機関

高知市中心部から車で約20分。駐車場（大型バス4台・普通車50台）あり。バスを利用する場合は次のとおり。

［県交通］船岡南団地発歴民館行き終点下車。領石・奈路・田井方面行き学校分岐（歴民館入口）下車。（徒歩5～10分で資料館へ）

［土　電］新改・白木谷方面行き岡豊橋下車。（徒歩10～15分で資料館へ）

〔図録販売中〕

○「鯨の郷・土佐～くじらをめぐる文化史～」展示解説図録
頒価千円送料一冊三一〇円
頁数八八頁（内カラー六四頁）
二冊以上のご注文はお問合せ下さい。残部僅少。

○「常設展示案内図録」
頒価千五百円送料一冊三一〇円
オールカラーで、総合展示室と民俗展示室の代表的な資料を紹介する。

〈ひとこと〉

企画展「土佐の戦国時代を掘る」の関連講演会には多数の方々の御参加を賜り、誠に有難うございました。本号には、第一回講演会をお願いした埋文センターのお二人から、その発表要旨を御寄稿頂きました。（下村）

巻頭の玉稿を頂いた大脇先生ほか関係各位のお世話になりながら、春の企画「土佐古絵図展」を準備中です。現在、絵図の展示方法について頭を痛めています。（梶原）

平成五年四月一日
編集・発行　高知県立歴史民俗資料館
〒783 南国市岡豊町八幡1099－1
TEL　0888－62－2211
FAX　0888－62－2110